新刊紹介

統計學原理

宗藤圭三著
弘文堂發行

それが正當であるか否かは別として、觀念的なものより事實的なものに人々の關心が向けられつゝある傾向をわれわれは見る。觀念的なものゝ排擊さるゝ理由は多くそれが個人的隨想に陷入るの危險性についてゞある。と云つて、所謂事實性は自らその正當なる權利を示すべく己自らを判明に照らされてゐるとはいへない。何故なら、所謂觀念論的思惟に於ける形式及內容の對立のその內容性と事實性とは異れる圈域に住んでゐるからである。現象學の進まんとする卽物的傾向はこの事實性への掘下げであることは疑へない。この卽物性は二つの傾向をもつて延びる可能性をもつてゐる。一つは自我の事實性に向つての方向であり、他は事物の事實性に向つての方向である。一般に現在の現象學の位置づけは前者への方向を辿つてゐる。この進行にとつて或種の寂寥を伴ふのは、それが只世界觀の哲學に深入りしすぎるの感じである。云はゞ生活に安泰なるものが周圍を見回はし、それについての一定の意見を定める底のものがある。ブランクが云ふ樣に、哲學はすでに科學ではなくなつて、世界觀でしかなくなつたかの觀がある。純粹科學並に技術科學は、今哲學を要求しはじめてゐる。もし哲學がそれに手を觸れぬならば、科學は自ら新しき哲學を生み出すであらう。云はゞ個人的意見を越えて、科學は自らを理論づけはじむるであらう。換言すれば、卽物性は事物の事實性に向つて眼を轉ずるであらう。この時現象學は可成の方向轉換をもたなければならない。この場合この方向に何等かのきつかけとなる哲學があるとすればそれは、數學を根據とする純粹論理學の人々であるであらう。マールブルグ學派はこれに或種の寄與をあたへる。カッシラーの函數論的哲學はその觀念論的視線を事實性の上に、殊に技術的科學の上に落すならば、それは豐穣な收穫を人類の上にもたらすものであるかも知れない。哲學がすでにプロパガンダとアッテーションに腕を籍す時代を成育しすぎて、もつと曠い展望を人類の技術的科學の上にひらく年齡となつたとするならば、哲學の仕事は急に多忙となる筈である。こゝに紹介する宗藤氏の統計學原理なる著はこの意味で哲學に興味をもつものにとつて、思惟の新しき攪拌作用をあたへるであらう。事實性がそれ自らを數の系列の中に位置をもつことは、われわれにとつてよき思惟對象である。これについて、或は蓋然判斷的取扱方、飛躍の原理としての取扱方、或は機能論理的取扱方等々、哲學はそれについて態度を定めるべきである。著者が實體概念的取扱方、したがつてミルの自然の齊一性によるところの歸納的飛躍に歸趨を求められたるはわれわれにとりては一つの問題の提出であらねばならない。著書は博く且簡に殆んど一般的知識をことごとく盡されたるは讀者にとつてまことに幸である。（中井正一紹介）

手島瑣庵全集

柴田寅三郎編
明倫舍刊行

歷史性の問題が人々の問題となり、歷史感が人々の興味を引くこの事は、一つは奔放なる個人主義的考へ方の制動をも意味して

ゐる。それがやがて歴史性の問題が社會性の問題に關係をもつ所以でもある。今漸くこの歴史の問題が論爭の種として飽かれ、實質的にその史料の探索に眼が向けられ出した事は興味ある事實である。日本文化史に於て、新しき視角度で事實を把握せられんとしてゐるけれども、その材料が特殊の選擇を經てゐるが故に常にゆがめられたる事物しかゞ殘つて來ない事は殘念である。只わづかに德川時代には、漸く腐朽よりまぬがれたる捨てられたる貴重なる記錄が殘つてゐるであらうと推測せられる。かゝるものゝ輯錄と發表は、實に今われわれにとり望ましい事である。手島堵庵の全集の刊行はこの意味で貴重なる記錄である。堵庵をめぐる時代の背景はわれわれにとつて實に興味多い。日本文化が奈良平安鎌倉足利と貴族より宗教、宗教より武家へと權力が推移して、德川の三百年はそれ等の權力をそれぞれの機能として動かせながら複雜な組織を構成してゐた。この時に漸くブルジョアジーとしての町民がそれとしての機能をもちはじめる。そして彼等自らの文化をつくり上げる。浮世繪、淨瑠璃、草子、川柳等々のものは彼等の特殊のものであり、共通的に支那印度の風俗をのがれ儒佛的觀念に對して鋭き皮肉をもち、日本人的感覺の出發點を求める。眞の日本人感覺が己自らの形態と形式をもつたのはこの時であるとも云へるであらう。

かゝる情勢のとき石田梅巖等によつて起されたる哲學的運動は日本人の哲學としては興味多いものである。殊に享保以後の經濟的誤謬がくりかへされ米經濟より貨幣經濟に轉換せんとするクリシスにあたつて、世人は深い不安の中に生きた、武家貴族のもつ儒佛的哲學は彼等に對して力がなかつた、市民は市民のよるべき哲學をもとうとした。落語でよく題材となる心學が卽それである。それは徹底した卽物性を胎んだ哲學であり、その提唱者は吳服屋の主人か或は一介の農民である。それは藩學に對立し、或は激しき鬪爭までなしてこれに抗した。或は常にブロックを組み、潛かに政治運動にまでつきすゝむにも至り、ついに激しい斷腐の下をくゞつてそれは發展したのである。手島堵庵はこの運動の組織者とも云ふべき位置に居る。その手記が長く京都明倫舍にかくれてゐたことは識者の惜しむところであつた。今それが世にあらはれしことは人々のよろこびであればならない。

（中井正一紹介）

ギリシア＝ラテン講座　鐵塔書院發行

西洋の學問をする人々にとつてギリシア語の知識、ラテン語の知識は絶對に必要である。それは猶我々の國語國文を理解するのに漢文の知識が必要なのと同樣である。現代の國語の口語文といへども漢文の知識が十分になくしては、正しい解釋は出來ない。まして學術的論文となれば尙更である。この關係は西洋近代語とギリシヤ語・ラテン語との關係にも當嵌まる。

本講座はギリシア・ラテンの二部に分れ、各六册で完結する豫定である。今各部の第一册を見るに、紙數の半ばを文法に割き專ら初學入門を標準に、成るべく繁を避け要を拔いて、要領を深切に示してある。ギリシア・ラテン語の如きはその入門に際し、文